



TITLE:

# マルサス『人口論』の形而上學的基礎

AUTHOR(S):

白杉, 庄一郎

---

CITATION:

白杉, 庄一郎. マルサス『人口論』の形而上學的基礎. 經濟論叢 1942, 54(2): 192-205

ISSUE DATE:

1942-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/131644>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第 卷四十五第

月二年七十和昭

## 論 叢

日本經濟學の源流……………經濟學博士 本庄榮治郎

資本主義的論理……………經濟學博士 柴田敬

江戸時代の經濟問題……………經濟學士 堀江保藏

海運政策の積極性……………經濟學士 佐波宣平

景氣循環過程に於ける消費財產業の意義……………經濟學士 青山秀夫

## 研 究

サス『人口論』の形而上學的基礎……………經濟學士 白杉庄一郎

事變下の中小工業と金融……………經濟學士 田 杉 競

トーマス・マンの重商主義思想……………經濟學士 堀江英一

## 說 苑

宋代の農田に就いて……………經濟學士 穗積文雄

## 附 錄

彙報・外國雜誌論題

## 研究

## マルサス『人口論』の形而上學的基礎

白 杉 庄 一 郎

『人口論』の著者ロバート・マルサスによれば、社會改善の途上に横はる大障礙は我々人間の克服し難いものである、蓋しこの障礙は生活資料を越えて増加せんとする人類の永久的傾向に基くものであり、而もこの傾向は生物に關する一般法則の一つにほかならず變化の豫期され難いものであるからである。これは實にマルサス自身の認めてゐる如く「大いに我々の意氣を沮喪せしめる省察」であり、單に社會改革者にとつてのみならず人間一般にとつて極めて絶望的な思想であると云はなければならぬ。實際かゝる思想は、その背後に何らかの救ひを豫想せずしては、人々の承認を得ることの困難なるは云ふまでもなく、自分自身安んじて主張し得ない底のものさへ考へられるのである。蓋し不斷の向上を求めて止まないのが人間性の一面であるからである。それ故マルサスは一つの形而上學的世界觀を持ち出すことによつて救ひを用意し、この絶望的な人間ならびに社會觀の緩和に努力せざるを得なかつたのである。そしてこの形而上學的前提がなければ彼の人口原理は不斷の向上を求めて止まぬ人間性との正面衝突に陥り、その結果かれはこの人口原理を大膽率直に闡明することを躊躇せざるを得なかつた。

1) First Essay on Population 1798, reprinted London 1926, p. 346.

たであらうといふ意味に於て、それは彼の『人口論』の據つて立つ根柢をなすと考へられる。然るに従來『人口論』の論評に當つてこの部分に觸れたものは極く稀である。勿論マルサスの形而上學的世界觀は當時のイギリス倫理學者のそれを受容れただけで別に獨創的なものでないとも云へる。事實ボーナーの言つてゐる如く、彼が形而上學的天才であつたといふ徵候は何もなく、哲學史上に於ける彼の地位を指定することは困難であるかも知れない。然し經濟學史の立場からは、マルサス『人口論』の形而上學的基礎を明かにすることはイギリス古典經濟學の根本性格を把握する上に意味のないことではなからう。マルサスの『人口論』はどこまでもイギリス古典經濟學の一所産であり、その代表的な文獻の一つに屬すると考へられるからである。

## 二

マルサスの『人口論』は第一版と第二版以後とを區別して取扱ふのが通例となつてゐるが、ボーナーに従つて前者を第一論文と呼び後者を第二論文と呼ぶならば、『人口論』の世界觀的基礎が明確な形をとつて現れてゐるのは主として第一論文に於てである。然し第二論文に於てこの思想が撤回されたとは考へられない。否、第二論文を特色づける道德的抑制に關する思想が基礎づけられてゐるのは全く第一論文に展開されてゐる世界觀によつてである。この點に關する詳細は別論に譲り、こゝでは先づ第一論文に現れてゐる『人口論』の世界觀的基礎を見て行きたいと思ふ。

第一論文に現れてゐるマルサスの世界觀はアダム・スミスのそれに極めて近いものがあり、理神論的と特徴づけて差支へないやうに思はれる。スミスの場合と同じくマルサスも「宇宙の創造者」(The Creator of the Universe)すなはち「最初に宇宙の秩序を作り其の創造物の利益のために今もなほ其の様々の作用を遂行する神」(Being who

2) James Bonar, Malthus and his Work, 2nd ed., p. 39. 堀網夫、吉田秀夫、  
兩氏共譯、マルサスと彼の業績、五八・五九頁。

first arranged the system of universe; and for the advantage of his creatures, still executes, according to fixed laws, all its operations) を認める。それはまた「自然の法則を作り其れを運行して行く力」とも觀念されてゐる。彼の見るところによれば、萬物は「萬能者」(a being of mighty power) たる神によつて創られ、この神によつて支配される。例へば小麥や樫の實は一見きはめて小さな物質であるが、驚くべき選擇・結合・排列および創造の力をもつてゐて、驚くべき嗜好と判斷と手際とを以て周圍の塵埃と濕氣の中から自己の目的になつた部分を蒐集し排列し選擇して最初に地中に置かれた物質とは如何なる點に於ても類似せざる美しい形態になるのである。この奇蹟についてマルサスは述べてゐる。

「あらゆる種子が示す選擇・結合および變形の力は眞に奇蹟的である。何人がこれらの小さな物質の中にこれらの驚くべき力が含まれてゐると想像することができよう。私には偉大な自然の神(the mighty God of nature) が總てこれらの作用の中に全力を發揮してゐると考へた方が遙かに哲學的であるやうに思はれる。この全能の存在にとつては、樫の實なしに樫の木を生ぜしめるは樫の實を以てすると同様に容易であらう。種子を地中に置くといふ準備過程は、物質をして精神にまで覺醒せしめる(matter into mind) に必要な様々の刺激の中の一つとして人間が使用するやうに定められたに過ぎない。世界は精神の創造および形成のための偉大な過程である(the world is a mighty process for the creation and formation of mind) と考へるのは、我々の周圍の自然現象や人生の様々の出来事および神の人間に對する不斷の啓示とも同様に矛盾しない思想である。」

宇宙ないし世界が偉大な自然の神の創造物であり、創造者は被創造物の幸福を目的として自然法則に従つてそれを支配するといふのは、スミスの場合に見られると同様の世界觀である。然しこの點に關しスミスとマルサスの間に直接の關係があつたとは云へない。それは全く十八世紀に於けるイギリスの主要な道德哲學者の世界觀であつたのである。そしてスミスはそれをシャフツベリーやハチエソンに負うたのであるが、マルサスはタツカイ(Abraham Tucker) やペーリー(William Paley) の追隨者であつた。そこからまた兩者の間に於ける若干の相違が起

3) First Essay, p. 12, p. 239.

4) ibid. p. 160.

5) ibid. p. 246.

6) ibid. pp. 246-247.

7) 拙稿、アダム・スミスの自然的自由、本誌第五二卷第四號。

つてくるのであつて、特に「世界は精神の創造と形成のための偉大な過程である」といふのはスミスの場合には見られなかつた思想であつて、ボナーはそれをタツカーの暗示に歸してゐる。<sup>8)</sup>

しかも、世界は精神の創造と形成のための偉大な過程であるといふ思想は『人口論』の世界觀的基礎づけに極めて重要な地位を占めてゐる。第一論文に於てマルサスは人口論の世界觀的基礎のために最後の二章をあて、それを人生に於ける多くの害惡の存在を説明する「精神に關する理論」(The theory of mind)と呼び、「著者が最後の二章に於て略述した精神に關する理論は著者自身の満足する程度に人生の多くの害惡の存在を説明する」と述べてゐるが、彼がこの部分を精神に關する理論と呼ぶ所以は、彼が世界を以て精神の創造と形成のための偉大な過程と見るからである。彼は地上に於ける人間の地位は我々が我々の周圍に觀察する様々の自然現象と矛盾せず、神の力や恩寵や明識に關する我々の觀念と一致したものであるとして、次の如く述べてゐる。

「私は世界とこの人生を試煉のためではなくて、精神の創造と形成のための神の偉大な過程・活動力のない混沌たる物質を魂にまで覺醒せしめ地上の塵を靈にまで昇華し粘土の塊から天界の閃光を引出すに必要な過程と考へたいやうな氣がする。そしてこの問題をこのやうに見る場合には、人生を通じて人間の受取る種々の印象や刺戟は人間の創造者の形成しつつある手と考へられ得るのであつて、創造者は一般法則によつて行爲し、神に接觸せしめ活氣を與へることによつて人間の不活潑な生存を覺醒し高尚な享樂の能力を獲得せしめる。人間の原罪は云はゞその生れたままの混沌たる物質の無感覺および腐敗である。」<sup>10)</sup>

(註) マルサスはこゝでは人生を試煉と見ることに反對してゐるが、この思想は第二論文の附録に於て訂正されてゐる。<sup>11)</sup>

右の如くマルサスは世界と人生を物質から精神を創造する神の偉大な創造の過程と見る。惟ふに、世界に關する限り精神とは生命といふに等しく、人間に關する限り物質とは肉體のことのやうである。而して彼は精神が物質と異つた實體であるか若しくは物質の純化した形態にすぎないかは結局は言葉の争にすぎないと觀て、この問

8) J. Bonar, Malthus, p. 35 note.

9) First Essay, Preface, p. iv.

10) ibid. pp. 353-354.

11) Essay, 7th ed., p. 526.

題に立入らない。尤も彼は「精神は、物質から形成されたものであらうと、何か他の實體から形成されたものであらうと、本質的に精神として存在する。我々は經驗によつて靈魂と肉體とが極めて緊密に結合してゐるのを知る、そしてあらゆる現象は両者が幼時から相携へて成長することを示すやうに思はれる。」と一元論的見解に立たうとしてゐる。而して精神と肉體とは神の創造過程に於て統一される。そしてそこから地上に於ける人間の地位が解明される。「我々の信するところによれば、神は精神ならびに肉體の創造者である、そして精神と肉體とは兩方とも同時に自己自身を形成し發展せしめつゝあるやうに思はれるから、神は絶えず物質から精神を形成することに從事してをり、人間が人生を通じて受取る様々の印象はこの目的のための過程であると想像することは決して理性もしくは啓示に相反するものではなく、また實に自然の現象にも矛盾するものではない。そしてこの仕事は確かに神の神たる所以にふさはしいなの仕事である。」<sup>12)</sup>

## 三

右の如くマルサスは世界および人生を神が物質を精神にまで覺醒せしめる過程として把握することにより地上に於ける人間の地位を説明せんとするのであるが、神が物質を精神にまで覺醒せしめるといふことは人間に關する限り物質的にして不活潑な人間存在を活氣ある精神的存在にまで高めるといふことである。その際、人間が不活潑にして怠惰な本性を有するものとして捉へられてゐる點は注意を要する。この人間觀は徹底的に批判されねばならぬが、今は専らマルサスの主張を辿つて行くことにしたい。物質的にして不活潑な人間を活氣ある精神的存在へ高める刺戟としてマルサスは第一に肉體の欲求、第二に苦痛もしくは害惡を避けんとする精神の欲求をあげてゐる。マルサスの目的は人口原理を肉體や精神の欲求と同様に人間を勤勉ならしめるための神の法則として

基礎づけるにある。人口原理が據つて立つ公準の一つたる食物の必要といふことが既に同じ意味をもつてゐる。

「生命の維持のための食物の必要は恐らく他の如何なる肉體的もしくは精神的の欲求よりも多大の努力を喚起する。神は、地表に多くの豫備的勞働と工夫が加へられるまでは、土地をして多量の食物を生産せしめないことにした。……最高の創造者は疑ひもなく、我々が種子と呼ぶ小さな物質の補助がなくとも、或はさらに人間の補助的勞働および注意がなくとも、その創造物に使用させるために、あらゆる種類の植物を生育せしめ得るであらう。土地の耕作・開墾・種子の蒐集および播種の過程は確かに神の創造の補助ではなくて、人間を行爲にまで覺醒せしめ人間の精神を理性にまで形成するために、人生の祝福の享受に先づ以て必要とされたものである。」<sup>13)</sup>

同様に神は人間を勤勉ならしめ地上に人を滿すために、人口が食物よりも速かに増加するといふ人口原理を定めた。

「我々が人口原理に立歸つて、人間を現實にあるがまゝに、即ち必要によつて強制されなければ不活潑にして遲鈍であり且つ勞働を嫌惡するものと考へるならば、(而して我々の粗雑な空想に従つてあり得るかも知れぬ人間について語るとは確かに愚の骨頂である)、我々は生活資料に對する人口増加力の優越といふことがなかつたならば世界は人間の住むところとならなかつたであらうと斷言して誤らないであらう。人間に對するこの刺戟が強くとつとつ不斷にはたらいで土地の耕作に驅立てるにもかゝらず、なほ我々が耕作の進歩の極めて緩慢であるのを見たとすれば、我々は刺戟が少く不充分であつたのであらうと結論して差支へないであらう。この不斷の刺戟のはたらく下に於てさへ、自然の豐度の最も大なる國々に住んでゐる野蠻人は長い時期を經過した後でなければ牧畜もしくは農業に従事しないであらう。もし人口と食物とが同じ割合で増加したならば、人間は恐らく野蠻狀態を脱却しなかつたであらう。而して人口が一旦地球上に充ちたとしても、アレキサンダーやジュリアス・シーザーやタメルランのやうな人々もしくは血腥き革命が人類を回復すべからざるほどに稀薄にし、創造者の大計畫を破壊するかも知れない。傳染病の被害が長年月にわたつて感ぜられ、地震が一地方の住民を絶やすかも知れない。人口が依つて以て増加する原理は人類の惡徳もしくは自然の災害や一般法則に隨伴する部分的害惡が創造の高き目的を妨害するを防ぐのである。それは地上の住民を常に生活資料の水準一杯に保ち、且つ人間を驅立てて土地の耕作を擴大せしめ、從つて土地をして一層多數の人口を維持するを得せしめる強い刺戟として絶えず人間に働いてゐるのである。」<sup>14)</sup>

13) ibid. pp. 360-361.

14) ibid. pp. 363-364.



右の如くマルサスは人口原理の積極的意義を認める。しかしながら、人口原理はこの積極的側面と共に否定的側面をもつてゐる。神は人間を勤勉ならしめ地上に人を充すために、神の行爲の準則たる一般法則の一つとして、人口が食物よりも速かに増加するといふ人口原理を定めたのであるが、「この法則は部分的害惡を惹起することなしに作用し、以て神によつて明かに意圖された結果を生ぜしめることは不可能なのである。……勤勉に援助されるならば數年の中に豐饒な地方に人を満すであらうと同じ原理が、長く人の住まつてきた國々に於ては困窮を惹起せざるを得ないのである。」<sup>15)</sup>マルサスの考へるところによれば、神の一般法則は被創造物の一般的幸福を目的とするものであつて、それに由來する部分的害惡の存在はそれに抵觸するものではない。「一般法則は明かに部分的目的のために意圖されたものではなくて、人類の大部分と多くの時代とを通じて作用するやう豫め計畫されたものである」<sup>16)</sup>。すなはちそれは特殊的偶然的なものではなくて、一般的恒常的なものである。而して神の従ふ一般法則とは畢竟自然法則なのであるが、人口原理もかくの如き恒常性をもつた自然法則にほかならない。マルサスは明瞭に述べてゐる、「人口原理が各國別々の事情に應じて變更され得るといふことは、自然法則に關する我々の普遍的經驗に反するのみならず、知性の形成に對する一般法則の絶對的必要性を認める我々自身の理性にも矛盾するであらう」<sup>17)</sup>。従つて人口原理は神の一般法則として右の如く人類の勤勉に對する刺激といふ一般的幸福を目ざすものであるにもかゝらず、否その故に、それはまた同時に部分的害惡の原因でもあり得るのである。然しマルサスは人口原理に由來する困窮そのものにも人間生活に對する積極的意義を認める。

## 四

マルサスが人口原理に由來する困窮に積極的意義を認めるのは、困窮が人間を勤勉に驅立てる拍車と考へられ

15) *ibid.* pp. 365-366.16) *ibid.* pp. 391-392.17) *ibid.* p. 366.

るからである。この主張の基礎となつてゐる一般的思想はかうである。「快樂の追求よりはむしろ苦痛を避けんとする努力が人生に於ける行爲の大なる刺戟である。而して或る特定の快樂に注意するに、それに關する考慮が長く續いて遂にその缺如の下に感ずる苦痛または不安の感覺に達するまでは、我々はそれを獲得するために行動に出でないであらう、とロックが言つてゐるのを私は想起す。害惡を避け幸福グッドを追求するのは人間の大なる義務であり仕事であるやうに思はれる、而してこの世は時にこの種の最も間斷なき努力の機會を提供するやう豫め計畫されてゐるやうに見える。而して精神が形成されるのはこの努力これらの刺戟によつてなのである。ロックの思想が正しいとすれば、而して正しいと考ふべき大なる理由があるのであるが、害惡は努力を創造するために必要であるやうに思はれる。そして努力は明かに精神を創造するために必要であるやうに思はれる。」人口原理に由來する害惡もまた人間努力の刺戟となり精神を覺醒せしめる。即ち曰く、

「この種の間斷なき刺戟を供給し人間を驅立てて土地を充分に耕作することにより神の恵み深い計畫を進めしめるために、人口が食物よりも遙かに速かに増加するやう定められてきた。この一般法則は疑ひもなく多くの部分的害惡を惹起する。然し少し反省して見ると、それは一層多くの善を生み出すといふことが我々を満足させるであらう。努力を創造するためには強い刺戟が必要であるやうに思はれる、そしてこの努力を指導し推理能力を形成するためには神が常に一般法則に従つて行爲することが絕對に必要であるやうに思はれる。」<sup>19)</sup>

かくの如く人口法則によつて惹起されると認められる困難でさへ神の一般目的を妨害するよりはむしろ促進する傾向があるのであつて、これらの困難は普遍的な努力を喚起し概して精神の發達に好都合であるやうに思はれる。然しこの點に關しマルサスは、刺戟の過大もしくは過小なはち極貧もしくは冗富は同様に不都合であつて、「社會の中間層 (the middle regions of society) が知的進歩に最も適するやうに思はれる」と、看過することの

18) ibid. pp. 359-360.

19) ibid. pp. 361-362.

できない重要な留保をなしてゐる。然し彼は社會全體が中間層たることを期待するは總ての自然の類推に反すると主張する。地球の溫帶は人間の精神的ならびに肉體的精力に最も好都合であるやうに思はれるが然し地球全體が溫帶ではあり得ないと同様に、我々は社會から富裕と貧困とを除去して總ての部分で中間層に置くことはできないと云ふのである。尤も彼といへども極端な階層にある人數を減少せしめ中間層にある人數が増加せしめられる如き政治様式を見出すことができるならば、それを採用するは疑ひもなく我々の義務であらうと考へる。然しそれにも自ら限度があると主張する。

「極端な部分を或る程度以上に減らせば必ず、中間層全體を通じて行はれる活氣ある努力——それこそが彼等が知的に發達するを好都合にする原因なのであるが——を弱めざるを得ないのである。もし何人も社會に於て向上を望み得ず落魄を恐れ得ないならば、もし勤勉がその褒賞をもたらさず怠惰がその懲罰をもたらさないならば、中間層は確かに現在あるが如きものではないであらう。この問題について推理するに當つて明かに我々は主として人類の大衆を考察すべきであつて、個々の場合を考察すべきではない。疑ひもなく、場合によつては多數の大衆の中には、早くから特別の刺激によつて鼓舞されて、彼等の活動を續けさせるために狭隘な動機の不斷の發動を必要としない多くの人々があり又ある筈である。然し我々が種々の有益な發見や價值ある著作や其の他の賞讃すべき人類の努力を顯るならば、我々はその多くが少數の人々に働きかける一見廣範な動機よりも、多數の人々に働きかける狭隘な動機に歸さるべきであることを見出すであらうと私は信ずる」<sup>20)</sup>

こゝでも人間は本性怠惰にして不活潑なものであるといふことが勿論のことゝされてゐる。この人間觀を前提してその上でマルサスは、「人生の困難が才能を生み出すに與つて力があると我々は毎日の經驗から確信せざるを得ない。人々が自分自身もしくはその家族を支持するために必要な努力はしばしば、然らざれば永久に眠つてゐたかも知れぬ諸能力を覺醒せしめる」<sup>21)</sup>と、人口原理から起つてくる困窮の人生に對する積極的意義を強調するのである。而して困窮の人生に對する意義は勤勉に對する刺激として才能の啓發に資するのみならず、さらに心

20) ibid. pp. 369-370.

21) ibid. p. 371.

情の陶冶に貢献するといふ今一つの意義をもつてゐると考へる。

「人生の悲哀や困窮は引續く特別の印象によつて心情を和げ慈悲深くし、社會的同情心を覺醒し、總てのキリスト教的道德を生み出し、且つ他愛心を充分に活動せしめるに必要と思はれる今一つの種類の刺激を形成する。繁榮が一樣に引續くならば、品性を向上せしめるよりはむしろ墮落せしめる傾向がある。未だ曾つて自ら悲哀を知らない心は、その同胞の苦痛や快樂、缺乏や欲望をしみじみと感ずること稀であらう。かゝる心は、最高の才能の所有以上に人間の品性を尊嚴ならしめさへする友愛の熱情や深切にして優しい愛情を以て充されてゐることは稀であらう。實際、才能は疑ひもなく精神の極めて秀でた美しい特徴であるけれども、決してその全體を構成するものとは考へ得られないのである。」<sup>22)</sup>

知性と徳性とは必ずしも一致するものではない。のみならず、才能は誤用されることのありさへするものであつて、このことがまた知性と徳性との距離について考へしめる。然しだからと云つてマルサスは決して知性を輕視するものではない。否、彼は才能の誤用から來る惡をも徳の成立するための一契機と見る。彼は惡の道德的意義について述べてゐる。

「道德的善惡が道德的卓越の創造に絶対に必要であるといふことは大いに本當らしく思はれる。たゞ善だけしか見せられない人間は盲目的必然によつて強制されるのだと云つてよい。この場合、善の追求は有徳な性向の徴候たり得ない。……道德的善惡を見て否認と嫌惡を感じてきた者は、單に善のみを見てきた者と本質的に異なる。彼等は別々の印象を受けてきた粘土の塊りである。それ故、彼等は必然的に異つた形をとらざるを得ないのである。もしくは、たとへそれが兩方とも同じやうに美しい徳の形をもつとしても、一方はその實體に確固性と耐久性とを與へるに必要な高度の過程を受けてきたが、他方はなほ損傷の危険にさらされ、あらゆる偶然的衝動によつて破壊され易いといふことを認めなければならぬ。徳に對する熱烈な愛好および嘆賞はそれに反對する何物かの存在を意味するやうに思はれる、而して形式および實體の同じやうな美しさ、品性の同様の完成が、道德的善惡を見て起る否認の印象なくしては生れて來ないといふことは、大いに本當らしく思はれる。」<sup>23)</sup>

マルサスが否定を含まない直接的な善ではなくて、惡に媒介された善こそが本當の善であると考へやうとして

22) ibid. pp. 372-373.  
23) ibid. pp. 375-376.

ゐるのは全く正しいと云はなければなるまい。而してマルサスの場合この思想は目的論的調和的な世界觀によつて支へられてゐたものであることは注意を要する。惡の存在は自然の多様性といふことの一つの現れにほかならないのであつて、善と並んで惡を存在せしめる自然の多様性は人間の精神を發展せしめる。マルサスは一方に於て人間努力の前提として自然法則の恒常性といふことを重視してゐるが、他方に於ては自然の多様性といふことの精神的諸能力の發展に對する意義を強調してゐる。<sup>24)</sup>「精神が欲情や肉體の欲求によつて覺醒されて活動を始めるとき知的欲求が起つてくる、そして知識に對する欲望と無智に堪え難いことゝが重要な新しい部類の刺激を形成する。自然のあらゆる部分は特にこの種の精神的努力に刺激を供給し、間斷なき研究に無盡藏の食物を提供するやう豫め計畫されたかの如くに思はれる。自然の形態と作用との無限の多様性は、それが作り出す印象の多様性によつて直接に精神を覺醒し改善するのみならず、調査や探究に極めて廣範な領域を提供することによつて進歩の豊かな源泉となる。一樣にして變化のない完成したもの、同様の覺醒力をもち得ないであらう。形而上學の總ての問題が朦朧の中にあるのも同様に知識に對する渴望から起つてくる刺激を加重するために豫め計畫されたものであるやうに思はれる。恐らく人間は地上にある間は決してこれらの問題に關して完全な満足を得ることはできないであらう。然し、このことは決して人間がそれを研究してはならぬといふ理由ではない。人間の好奇心のこれらの興味ある對象をめぐる暗黒は、知性の活動と努力に無限の動機を供給する目的を有してゐるのかも知れない。この暗黒を除去せんとする不斷の努力は、たとへ成功しないとしても、思考能力を激勵し改善する。もし人間の研究題目が盡きてしまふならば恐らく精神は沈滞するであらう。然し自然の無限に多様な形態と作用とはかゝる時期の何時か到來するのを妨げてゐるのである。人口原理から起つてくる惡徳や窮乏についても同様

24) ibid. pp. 362-363.

25) ibid. pp. 377-381.

のことが云へる。

「實際、無限の變化といふことが自然の著しい特徴であるやうに思はれる。自然の繪畫のここかしこに交り合つてゐる陰影はその溢るばかりの美しさに精氣や生命や卓越を與へる、而してかの粗糲と不平等・優者を支へるかの劣者は往々近視眼者の顯微鏡のやうな潔癖な眼を怒らすことがあるけれども、然し全體の均齊・優美および適當な釣合に貢獻する。」<sup>26)</sup>

「總ての氣候が溫暖でないとか、永世の春が年中讀かないとか、神の總ての創造物が同じ利益をもつてゐないとか、雲や嵐が往々自然界を暗くし、惡徳や窮乏が道德界を暗くするとか、總ての創造物が等しく完全に形成されてゐないとか云つて、愚痴っぽく不平を云ふのを止めよう。理性と經驗の双方が我々に指示するところによれば、自然の無限の多樣性は（そして多樣性は劣等な部分や外觀上の瑕癈なくしては存在し得ないのであるが）創造の高遠な目的を進め、出来るかぎり最大の幸福を造り出すのに實によく適してゐるのである。」<sup>27)</sup>

かくしてマルサスによれば惡徳や窮乏や不平等は自然の多樣性といふことの現れにほかならず、人間の努力と向上に缺くべからざる刺戟なのである。人間はこれらの刺戟なくしては精神的にも肉體的にも努力しないやうに考へられる。その意味で人生からこれらの害惡を除去することはできないのである。

然し人生をこのやうに惡徳や窮乏や不平等と不可分離のものとするのは、一面に於て確かに憂鬱なことである。マルサス自身その人生觀について述べてゐる。「人生に關して著者の述べた見解は憂鬱な色彩をもつてゐる。

然し著者の自覺するところによれば、著者がかゝる暗い色を使用したのは、それが現實に繪の中に存在するとの確信からであつて、僻目や憂鬱な性癖からではないのである。」<sup>28)</sup>と。然し彼の世界觀ないし人生觀は必ずしも悲觀論的傾向をもつて特色づけらるべきものではない。彼の目的論的な自然主義の立場は、アダム・スミスの場合と同様、極めて調和的樂觀的な側面をもつてゐた。人間の完成に惡が必要であるが、しかも人間はその惡を克服して無限の完成を續けるやう作られてゐる。惡の存在といふ面から見れば人生は憂鬱ではあるが、それを媒介とし

26) ibid. pp. 377-378.

27) ibid. pp. 378-379.

28) ibid. Preface, p. iv.

て向上して行く面から見れば、人生は祝福である。

「人生は概して云へば、將來の狀態とは無關係に一つの祝福である。それは不徳な人々も、たとへ彼等が死を恐れないとしても、必ずしも容易に放棄しはしないであらう一つの賜物である。それ故、最高の創造者が無數の存在を最高の享樂を味ひ得るやうに形成しつつある場合に課する苦痛は、與へられる幸福に比較すれば輕きこと塵埃の如きものにすぎない、そして我々はこの世界には偉大な過程の一分子として絶對に必要である以上の害惡は存在しないと考ふべきあらゆる理由をもつてゐる。」

マルサスによれば、人間は此の世に於て其の肉體の構造および自然法則の作用から必然的に諸の誘惑に陥らざるを得ないのであるが、仁慈にして公正な神の手に成る創造物がどれ一つとして永遠の苦惱を受くべき筈のものはどうしても考へられないのである。彼にとつては人口原理から起つてくる害惡もまた神の意志に由來するものであつて、結局は被創造物の一般的幸福といふ神の世界創造の目的を達成するための手段にほかならなかつたのである。

## 五

人口原理に由來する害惡は神が人間の幸福を實現するための手段である。然し害惡が幸福に轉換されるためには、その間に人間の實踐が介入してこなければならぬ。無論、神が世界を創造し形成するにあつて採用する手段としての一般法則の直接の目的も、それが人間の努力に對する刺戟としての機能を有することにより、人間の實踐を媒介として實現されるものではある。然しこの場合の人間の活動は無自覺的本能的である。マルサスは眞に自覺的・道德的な實踐をむしろ、人間が自然の一般法則に由來する害惡に刺戟され、却つてそれから幸福を導き出さんとして努力するところに見るものゝ如くである。即ち彼は人口原理から起つてくる害惡に對する人間的實踐の意義を認めて次の如く述べてゐる。

「この世界の印象と刺戟とは神が物質を精神にまで形成する手段であり、而して惡を避け善を求める不斷の努力の必要がこれらの印象や刺戟の主要發條であるといふ思想は、人生の考察に於て起つてくる多くの困難を除去するやうに思はれ、自然的ならびに道德的害惡の存在したがつて人口原理から起つてくる自然的ならびに道德的害惡——而してそれは無論害惡の中の極く小部分

ではないのであるが——に對する充分の理由を與へるやうに私には思はれる。然し、かう假定すると、害惡が世界から除去されることは全くありさうにないことのやうに思はれるけれども、而もかゝる印象が創造者の明白な目的に副はないであらうといふことは明かである。もしその分量が人間の活動もしくは怠惰と共に減少もしくは増加しないとすれば、それは努力に對する刺激として大して力強く働かないであらう。この壓迫の重さと分配とが絶えず變化するといふことが、それを排除せんとする不斷の期待を旺盛ならしめるのである。<sup>30)</sup>

右の如く人口原理から起つてくる害惡は、人間の努力によつて根絶され得ないにしても、少くとも輕減することが出来る。のみならず、その輕減に努力することが、各人の利益であるばかりでなく、各人の義務でもある。

「害惡の世界に存在するのは、失望ではなくて、活動を作り出すためである。我々は辛抱強くそれに屈服すべきではなく、それを避けるために努力すべきである。害惡を自分自身および力の及び得るかぎりの廣い範圍から除去するために最善の努力を拂ふは各人の利益であるのみならず義務でもある、そして各人が努力すればするほど、またその努力が賢明に指導されればされるほど、而してかゝる努力が成功すればするほど、恐らく各人はますます自分自身の精神を改善し向上せしめるであらうし、またその創造者の意志をますます完全に實現するやうに思はれるのである。<sup>31)</sup>」

この思想を具體的に展開したものが第二論文に謂はゆる道德的抑制の義務にほかならない。従つて我々はマルサスの第一論文に現れてゐる人口論の形而上學的基础を辿つて終に、第二論文に詳しく展開されてゐる道德的抑制に關する思想の萌芽形態とも云ふべきものに到達した譯である。つまり彼は人口原理に基く人類進歩の障礙といふ絶望的な結論を緩和するために一つの形而上學的世界觀を持ち出し、その救済を用意して終に道德的義務の思想に到達したのである。このことは言ひ換へると、人口原理から起つてくる害惡に對する救済手段としての道德的義務に關する思想が一つの世界觀によつて基礎づけられてゐるといふことを意味する。事實マルサスは第二論文に於て人口原理に由來する害惡の根本的な救済手段として人口増加に對する道德的抑制の必要を強調してゐるのであるが、彼がそれを哲學的に基礎づけんとするに當つて據り所としてゐるのは右に述べた如き形而上學的世界觀である。少くともその限りに於て以上見てきた如き世界觀は『人口論』の第二版以後に於ても變ることなく、その根柢に横はつてゐると云ふことができるのである。

30) ibid. pp. 394-395.  
31) ibid. pp. 395-396.